

研究紹介 Rhif5 Ceinwen H. Thomas (1982) 'Registers in Welsh',
International Journal of Sociology of Language, 35, pp. 87-115.

水谷 宏

本論は、Donald MacAuley: 'Register range and choice in Scottish Gaelic'; Robert Browning: 'Greek diglossia yesterday and today'; S.A. Wurm and P. Mühlhäusler: 'Registers in New Guinea Pidgin' とともに、*International Journal of Sociology of Language*, Vol. 35 に特集された。編者 Jean Ure の序文では、「言語使用域」'registers' という用語が言語学用語としてはじめて用いられたのは、T.B.W. Reid (1956): 'Linguistics, structuralism and philology', *Archivum Linguisticum*, Vol. 8 とある。元来は音楽用語として「音域、声域」を表すものであるが、一般音声学用語としては、変種内で用いられる 'tessitura' とともに、「声質」voice quality の一種として、「発声のタイプ」types of phonation を指して、この 'registers' という用語が使われる (D. Abercrombie (1967: *Elements of General Phonetics*, pp. 99-102.)

このような多義語である 'registers' は、社会言語学的に用いられると、「言語使用域」を指し、カムライグ語を研究する場合、また、学習する場合にも、非常に重要である。特に、「文章語カムライグ語」Cymraeg Llenyddol と「口語カムライグ語」Cymraeg Llafar との区別は、従来から（そして、現在も）、多くの専門家により指摘されているのである。

筆者の知る限りでは、Syr John Rhÿs (1896) と、Syr Ifor Williams (1945?) の発言がある（本会機関誌「日本カムライグ研究」*Bwletin* 第1巻第1号, tt. 10-11.）。以下に、本論文の要点を纏めておく。

- 1) 「併合法」(1536年)以後、「教会と家庭」という極端に狭い使用域に限定されてきたカムライグ語は、従って、その使用域を十分に発達させることは不可能であった事情を説明し、一方、20世紀後半の復権運動と相俟って、公的使用が認められると、次第にその使用域は拡大し始めたという歴史的な変遷について概略をまとめている。
- 2) 16世紀における聖書の翻訳作業の過程では、口語的特徴である「くだけた言い方」や「地域方言的特徴」には極めて消極的な態度が見られる一方、それ以前の中世の時代に発達していた、作詩法における厳密な言葉の用い方を遵守する傾向が著しかった。そのような過程を通じて、現代文章ウェールズ語が発達した。
- 3) くだけた口語の使用域には見られない、文章語の7つの特徴について、豊富で適切な具体例を挙げて説明している。

- 4) ウェールズ大学や学会等々の努力で、専門用語集が出版されるなど、諸科学の分野での使用域が拡大していったが、語形成、綴字法、実際的使用の面では、相当に問題が多く、にわかには受け入れがたいものも見られる。しかし、現実的には、「造語」をも含めて、ウェールズ語の使用域が相当な広がりを見せていることは事実である。
- 5) 詩の領域でのウェールズ語の使用は、他の多くの言語と同様、保守的な使用が特徴となっていて、中世の散文や聖書の語法が保持される傾向が強い。特に、伝統的な詩形との関係で、俗に言われている「古風な言い方」が保持されているが、これは、方言でも用いられている現象であり、必ずしも「古風」という言い方は適切ではない。
- 6) 英語の影響もさることながら、ウェールズ語が十分に使えないことに起因する「混合言語」、つまり、英語をウェールズ語文の中に挿入して用いるような使い方が観察されるが、好ましいことではない。
- 7) 一般に「話し言葉の標準」と考えられている使用域は、教会での牧師の説教に用いられるものだが、文章語同様、「聖書のウェールズ語」the biblical Welsh から発達したものである。大学の講義や演説で用いられているものが、「もっとも形式的」な変種で、文章語に極めて近い。それよりも「くだけた」ものは、放送で用いられているものであり、「もっともくだけた」変種は、「地域方言」であり、生まれながらにウェールズ語を第一言語とする人々が、日常生活での親しい人たちとの会話で用いている変種である。「容認発音」は存在しないので、話し手の音声的・音韻的特徴は、出身地を示すことになる。

Geraint Bowen 編 (1967 年) *Y Traddodiad Rhyddiaith yn yr Ugeinfed Ganrif* 「20 世紀における散文の伝統」の三つのテキストが、「話し言葉」の「形式度」の違いを示す例として挙げられている。

- 8) ウェールズ語は、フランス語のように、ti (親しい間柄) と chwi (尊敬語) を使い分ける言語の一つである。家庭、職場、学校等々で、年齢や性別などの要素のために、いろんな使い方があり、事例を挙げて説明している
- 9) Cymraeg Byw の功罪について、著者の意見が述べられている。

なお、Thomas (1982) 以外では、Robert Morris Jones (1974) 'Literary and Colloquial Welsh: Some Points of Divergence', *Studia Celtica Japonica*, No. 8: 1-14, と、J. Fife (1986) 'Literary vs. colloquial Welsh: problems of definition', *Word*, 37:141-51. があるが、カムライグ語の言語使用域に関する研究は、今後の成果が期待される分野の一つであろう。